

中国語受身構文に関する研究-「被」の範疇についての考察を中心に-

著者	沈 攪?
学位授与機関	Tohoku University
URL	http://hdl.handle.net/10097/55554

第 1 章 序論

本論文では、生成文法の枠組みに基づき、中国語受身構文に関する先行研究を概観し、中国語受身構文に対する事実観察と共に、代表的な 5 種類の分析を比較検討する。

生成文法の研究の発展に伴い、これまで中国語受身構文に対する多くの研究が行われている。本論文では、中国語受身構文における bei ‘被’ を前置詞として扱う分析、動詞として扱う分析、軽動詞として扱う分析、そして機能詞として扱う分析を比較し、妥当な分析を提案する。

本章では、本論文で取り上げる考察対象、そして論文全体の構成について概観する。

1.1 中国語受身構文について

中国語の 2 種類の受身構文の事例を (1) と (2) に示す。

(1) 张三 被 李四 打了。

張三 BEI 李四 殴る

‘張三が李四に殴られた’

(Huang 2004)

(2) 张三 被 打了。

張三 BEI 殴る

‘張三が殴られた’

(Huang 2004)

(1)において、‘被’ に後続する要素は NP である。(2)では bei ‘被’ VP であるとそれぞれ考えられている。(1)のように bei ‘被’ の後ろに動作主 NP が生じる構文は長受身構文と呼ばれる。(2)のような bei ‘被’ の後ろに動作主 NP が現れない構文は短受身構文と呼ばれる。

(2)は(1)から動作主が削除された文に見えるが、本論文の二章では、(1)と(2)の構文を個別に扱い議論を進めていく。

(1)と(2)のような事例は、動作に関連する受身構文であることから直接受身構文と呼ばれる。直接受身構文の他、中国語では直接的な動作に関連しない受身構文が存在し、それらは間接受身構文と呼ばれる。

(3)と(4)のような受身構文が中国語の間接受身構文である。

(3) 张三 被 土匪 打死了 爸爸。

张三 BEI 強盗 殺す 父親

‘張三が父親を強盗に殺された’

(Huang 2004)

(4) 李四 被 王五 击出了 一只 全垒打

李四 BEI 王五 打つ 1つ ホームラン

‘李四が王五に1つホームランを打たれる’

(Huang 2004)

Washio(1993)の理論によると、(3)のように主語が述部の目的語以外の位置と関係持つ(所有関係のような)ような事例は包括的受身構文と呼ばれる。(4)のように主語が表面的に述部のどの位置とも関係を持たず、被害を受けることを示すような事例は排他的受身構文と呼ばれる。

また、Tan(2006)は、保留目的語(すなわち、動詞に後続する位置に残る目的語)の違いにより、間接受身構文を分類している。

(5) 她 被 人 剪了 头发。

彼女 BEI 人 カート 髪

‘彼女は誰かに髪をカートした。’

このような受身構文では、「她」「彼女」は元々動詞の「剪了」「カート」の後ろにあり、移動操作により主語位置に移動する。しかし、「头发」「髪」は元の位置に留まる。この例では「头发」「髪」は保留目的語である。

目的語の違いにより、間接受身構文は次の6種類に分類される。

受身構文の主語と保留目的語が全体と一部の関係である間接受身構文は以下(6)のような構文である。

(6) 桔子 被 他 剥了 皮

オレンジ BEI 彼 抜く 皮。

‘オレンジの皮が彼に抜かされた。’

Tan (2006)

受身構文の主語と保留目的語の間に所有関係がある間接受身構文としては、(7)のような例がある。

(7) 张三 被 土匪 打死了 爸爸

張三 BEI 強盜 殺す 父親

‘張三が父親を強盜に殺された’

Tan (2006)

保留目的語が場所を表す間接受身構文では、(8)のような例がある。

(8) 学生 被 老师 赶出了 学校

学生 BEI 先生 追い出す 学校

‘学生が先生に学校から追い出された。’

Tan (2006)

保留目的語が結果を表す間接受身構文では、(9)のような例がある。

(9) 纸门 被 他 踢了一个 洞。

紙のドア BEI 彼 蹴る 1つ 穴

‘紙のドアは彼に蹴られて1つの穴を破れた。’

Tan (2006)

保留目的語が材料を表す間接受身構文では、(10)のような例がある。

(10) 花 被 他 浇了 水

花 BEI 彼 かける 水

‘花が彼に水をかけられた。’

Tan (2006)

動詞＋保留目的語が1つの複合述語になる間接受身構文としては、(11)のような例がある。

- (11) 他 被 学校 免了职
彼 BEI 学校 クビ。
‘彼は学校にクビられた。’

Tan (2006)

1. 2 中国語受身構文に関する研究における bei ‘被’ の範疇

中国語受身構文の研究では、bei ‘被’ の範疇について様々な研究が提案されてきている。。代表的な分析としては、bei ‘被’ を前置詞として扱う前置詞分析 (NP 移動分析)、前置詞と受身元素 (動詞) という2つの範疇に属する分析、動詞として扱う補文分析、軽動詞として扱う軽動詞分析と機能詞に扱う機能詞分析がある。

最も主流とされる分析は前置詞分析であり、bei ‘被’ は前置詞として分析される。この分析では、中国語受身構文を英語の by 構文と同様に扱い、そのような分析は英語の by 構文の説明がほぼそのまま適用される。

前置詞分析に加えて、bei ‘被’ が前置詞と受身元素 (動詞) の2つの地位を持つとする二重地位分析も提案されている。このような分析では bei ‘被’ を伝統的な前置詞分析のように前置詞として扱うのではなく、前置詞と受身元素 (動詞) の2つの範疇に属すると分析される。

第3の分析としては、動詞分析がある。動詞分析では bei ‘被’ を動詞として扱い、bei ‘被’ に後続する要素を補文として扱う。動詞分析は補文分析とも呼ばれる。

第4の分析としては、軽動詞分析がある。軽動詞分析では bei ‘被’ を普通の動詞として扱うのではなく、軽動詞として分析する。その分析は NOP (空演算子) あるいは PRO を用いて分析される。

第 5 の分析としては、機能詞分析がある。機能詞分析では bei ‘被’ は 1 つ独立した BeiP を形成すると分析される。

以上で紹介した分析の詳細および利点や問題点については、第 2 章と第 3 章で扱う。

1.3 論文の構成

本論文は 4 つの章からなり立っている。それぞれの章の内容は、以下のとおりである。

第一章（本章）では、中国語受身構文とは何であるか、中国語受身構文の bei ‘被’ の範疇について先行研究においてどのような分析が提案されてきたのかを概観する。

第二章では中国語受身構文について、先行研究として前置詞分析、二重地位分析、補文分析、軽動詞分析、機能詞分析を取り上げる。Huang(1982)、Li(1985, 1990)、Travis(1984)、Koopman(1984)は中国語受身構文の bei ‘被’ を前置詞として扱う。しかし、それに対して Huang(2004)は bei ‘被’ を前置詞として扱う問題点を指摘している。Shi(1997)は bei ‘被’ が動詞と前置詞の二重の地位を持つと提案している。それに対して、Tang(2008)は二地位重分析の問題点を指摘している。Hashimoto(1987)と Wei(1994)は ‘被’ を動詞として分析する補文分析を提案した。Huang(2004)は bei ‘被’ の補文分析の問題点を指摘している。Huang(2004)では中国語受身構文の bei ‘被’ を軽動詞として扱う分析を提案する。Li(2004)は直接受身構文の機能詞分析を提案する。Tan(2006)は 6 種類の間接受身構文の機能詞分析を提案する。

第三章では、Huang(2004)の軽動詞分析と Li(2004)、Tan(2006)の機能詞分析を対比し、より多くの中国語受身構文の実例を説明できるものを探求する。Li(2004)、Tan(2006)の機能詞分析では Agent が BeiP の Spec 位置に移動できないと論じられるが、bei ‘被’ の後ろの項が非生物、つまり動作主 (Agent) ではない場合の中国語受身構文の事例が説明できない。それに対して、Huang(2004)の軽動詞分析は bei ‘被’ の後ろの項が非生物の場合の中国語受身構文の派生を説明できる。結論としては Huang(2004)の軽動詞分析は Li(2004)、Tan(2006)の機能詞分析より多くの中国語受身構文の事例を説明できると示す。

第四章は結論である。論文全体をまとめた上で、本論文で解決できなかった問題、つまり軽動詞分析において、なぜ OP と叙述関係を構築するのは近い位置にある bei ‘被’ の後ろの

NP ではなく、より遠い位置にある bei ‘被’ の前の NP であるのかについて述べる。

第2章 先行研究と諸問題

本章では、中国語受身構文の bei ‘被’ における前置詞として扱う分析、動詞として扱う分析、軽動詞として扱う分析、そして機能詞として扱う分析を考察し、従来の研究における bei ‘被’ の範疇の扱い方を概観する。

Huang(1982)、Li (1985, 1990)、Travis(1984)、Koopman(1984)は中国語受身構文の bei ‘被’ を前置詞として扱う前置詞分析を提案した。Bei ‘被’ は主要動詞の主語項を抑え、主要動詞の目的語素性を吸収する機能を持つと分析されてきた。

しかし、それに対して Huang(2004)は bei ‘被’ を前置詞として扱うことの問題点を主語の θ -role の配置、「bei+NP」は PP と違う振る舞いを示すこと、coordination テストの結果、照応関係束縛の観点から指摘している。

Shi(1997)は bei ‘被’ が動詞と前置詞の二重の地位を持つと提案している。その分析には2つの分析がある。1つの分析では、長受身構文の bei ‘被’ が前置詞として分析され、「bei+NP」が1つの前置詞句を構成する。短受身構文では、bei ‘被’ は受身標識（動詞）として分析される。もう1つの分析では、受身標識の bei ‘被’ が主要部として、VP を補部として取り、短受身構文を構成する分析である。

しかし、TANG(2008)が二重分析の問題点を、副詞節現れる場合、同声削除（同じ発音が連続して出る時、一方を削除すること）の問題、広東語 bei2 の振る舞い、残留代名詞の観点から問題点を指摘している。

Hashimoto(1987)と Wei(1994)は bei ‘被’ を動詞として分析する補文分析を提案した。補文分析では(i) bei ‘被’ は主要動詞として扱う、(ii) 1つの二重位置述部が経験を表す、(iii) 1つの経験者(Experiencer)を主語として選択する、(iv) 1つの事象を補部として選択する。事象の目的語は主要主語が同一指標であるゆえに義務的削除をする。

しかし、Huang(2004)では受身構文における目的語位置の代名詞や照応詞の振る舞いが ECM 構文の目的語位置の代名詞や照応詞の振る舞いと異なることから補文分析の問題点を指摘している。

Huang(2004)では中国語受身構文の bei ‘被’ を軽動詞として扱う分析が提案されている。軽動詞分析では中国語長受身構文、中国語短受身構文、中国語包括的受身構文と中国語排他的

受身構文を分け、それぞれが NOP あるいは PRO などを用いて叙述関係、あるいはコントロールの関係を構築することにより受身構文が派生されると分析する。

Li (2004) は、中国語受身構文の直接受身構文の機能詞分析を提案する。Tan (2006) は中国語受身構文の 6 種類の間接受身構文の機能詞分析を提案する。機能詞分析では bei ‘被’ を機能詞として扱い、1 つの BeiP が形成される。この BeiP によって受身構文が派生されると分析する。

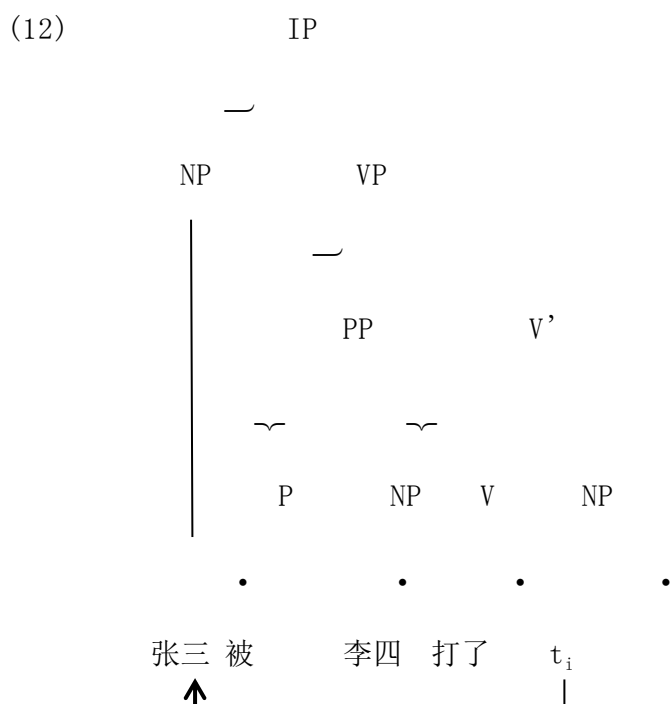
2.1 前置詞分析

2.1.1 前置詞分析における長受身構文

前置詞分析とは中国語受身構文の bei ‘被’ を前置詞として扱う分析である。このような分析は中国語受身構文の目的語は英語の by 構文と同様に NP 移動を通じて主語位置に移動すると分析され、NP 移動分析と呼ばれることもある。具体的には Huang (1982)、Li (1985, 1990)、Travis (1984)、Koopman (1984) などは中国語受身構文が (1) のように NP 移動によって生成されると主張する。

- (1) 张三 被 李四 打了。
 张三 BEI 李四 殴る
 ‘張三が李四に殴られた’

(1) のような中国語長受身構文は以下 (12) のように派生する。



‘張三が李四に殴られた’

受身形態素 bei ‘被’ は主要動詞の主語項を抑え、主要動詞の目的語素性を吸収する機能を持つ。格を失った目的語が移動によって非主題主語位置に移動する。動作主 (Agent) 項は形態素 bei ‘被’ を主要部にした PP として現れる。

NP 移動分析により、主題主語はある空範疇、つまり NP 痕跡と同一指標を持つはずであるという予測が立つ。以下 (13) の非文法はその特性を説明できる。

(13) a. * 张三 被 李四 打了 他。

張三 BEI 李四 殴る 彼

‘張三が李四に殴られた’

b. * 张三 被 李四 打了 自己。

張三 BEI 李四 殴る 自分

‘張三自身が李四に殴られた’

c. * 张三 被 李四 打了 王五。

張三 BEI 李四 殴る 王五

‘張三が李四に王五を殴られた’

d. * 张三 被 李四 来了 他。

張三 BEI 李四 来る 彼

‘張三が李四に来られた’

NP 移動分析は目的語位置を NP 痕跡であることを認める。(6d) の非文法性は (6d) の目的語位置がないためであり、(6a-c) の非文法は目的語位置に違う NP があるため非文法的である。

2. 1. 2 前置詞分析の問題点

Huang (2005) では前置詞分析 (NP 移動分析) の問題点を指摘している。

○前置詞分析では主語は非主題位置と分析され、つまり主語「张三」は目的語位置から NP 移動を通じて主語位置に上がる。「张三」は元の位置で動詞打了‘殴る’から 被動作主 (Patient) や主題 (Theme) の θ -role を貰うはずである。しかし、以下の例は中国語受身構文の主語はいつでも単なる被動作主 (Patient) や主題 (Theme) ではないことを示している。

- (14) 张三 故意 被 李四 打了。
 张三 わざと BEI 李四 殴る
 ‘张三がわざと李四に殴られた’

主語「张三」は動作者を指す「故意」「わざと」により修飾されることから「张三」は動作主 (Agent) の θ -role を貰うはずであり、1つの項は2つの θ -role を持つことが θ 基準を違反するが NP 移動分析の問題点となる。

○NP 移動分析では「bei+NP」は PP であると主張されるが、「bei+NP」は PP ではない証拠がある。「bei+NP」は PP のように時制節を越えることや文の先頭に移動することができない。以下の (15b) は「bei+NP」時制節を越える例である。(15c) は「bei+NP」が文頭に移動する例である。これら2つの例は中国語で非文法的である。

- (15) a. 张三 昨天 被 李四 打了 他。
 张三 昨日 BEI 李四 殴る 彼
 ‘张三が昨日李四に殴られた’

 b. * 张三 被 昨天 李四 打了 他。
 张三 BEI 昨日 李四 殴る 彼
 ‘张三が昨日李四に殴られた’

c. * 被 李四 张三 昨天 打了 他。

BEI 李四 张三 昨日 BEI 彼

‘张三が昨日李四に殴られた’

しかし、中国語では PP が時制節を越えること、文頭の位置に移動すること、そして節を越えることができる。(16b)は PP である「跟张三」‘gen 张三’が文頭の位置に移動する例である。(17b)は PP である「在桌上」‘机の上に’が節を越える事例である。(16b)と(17b)は中国語で文法的である。

(16)a. 我 跟 张三 很 处得来。

私 GEN 张三 とても 仲良し

‘私は张三とともに仲良し。’

b. 跟 张三 我 很 处得来。

GEN 张三 私 とても 仲良し

‘私は张三とともに仲良し。’

(17)a. 我 摆了 一盆花 在桌上。

私 置き 花 机の上に

‘私は机の上に花に置いた。’

b. 我 在桌上 摆了 一盆花

私 机の上に 置き 花

‘私は机の上に花に置いた。’

○NP 移動分析ににおいて「被李四」‘bei 李四’は一塊になり PP を形成するため、「被李四」‘bei 李四’が分離不可能のはず。しかし、以下の例が coordination テストを通じて、「李四骂了三声」‘李四に三回叱られた’と「王五踢了两下」‘王五に二回蹴られた’の2つは同

じ地位を持つこと示している。つまり NP 移動分析では bei ‘被’ と「李四」が分離されるはずで、bei ‘被’ と「李四」が一塊になり PP を形成されていないので、(18)の文法性が説明できないことになる。

(18) 他 被 李四 骂了 三声, 王五 踢了 两下。

彼 BEI 李四 叱る 三回 王五 蹴る 二回

‘彼は李四に三回叱られた、王五に二回蹴られた。’

○照応関係束縛により、「自己」「自分」は主語を指す。NP 移動分析においては、以下の例で出てくる「自己」「自分」は主語「张三」を指すはずである。

(19) 张三 被 李四 关在了 自己 的 家里

张三 BEI 李四 閉じ込める 自分 の 家

‘張三は李四に自分の家に閉じ込められた。’

しかし(19)の「自己」「自分」は「张三」と「李四」の両方を指すことができ、つまり「张三」と「李四」の両方が主語としての地位を持っていることになる。より正確に言えば、「李四」は前置詞の目的語ではなく埋め込み節の主語である。もし NP 移動分析を適用すれば李四は主語ではないので、以上の事実と矛盾する。

2.2 二重地位分析

2.2.1 二重地位分析における長受身構文と短受身構文

Shi (1997)は bei ‘被’ が動詞と前置詞の二重の地位を持つと提案している。

二重地位分析にはの中でも2つの分析がある。1つは長受身構文(20)の bei ‘被’ を前置詞として分析されし、「bei+NP」が1つの前置詞句を構成するとする。加えて、この分析では短受身構文(21)における bei ‘被’ は受身標識(動詞)として分析される。

(20) 张三 被 车 撞了.

張三 BEI 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた’

(21) 张三 被 撞了.

張三 BEI 轢かれる

‘張三が轢かれた。’

理論上、長受身構文(20)は(21)から得られる。すなわち短受身構文と1つの前置詞句が組み合わさって(23)の構造になる。(22)では同じ発音である bei ‘被’が2つ同時に現れているので非文法的になる。具体的には、同音語削除により、受身標識の bei ‘被’が削除され(19)の構造にならないといけない。(23)は(21)の構造を示すものである。もし前置詞と受身標識が(24)のように別の発音であったら、同時に現れても文法的である。

(22) * 张三 被 车 被 撞了.

張三 BEI 車 BEI 轢かれる

‘張三が車に轢かれた。’

(23) * VP

└─

PP VP

└─ └─

被 NP 被 VP

(24) 张三 叫 车 给 撞了.

張三 JIAO 車 GEI 轆かれる

‘張三が車に轆かれた。’

(25) VP

~
 PP VP
 ~ ~
 叫 NP 给 VP

もう 1 つの分析は受身標識の bei ‘被’ が主要部として VP を補部として取り、短受身構文を構成する分析である。

(26) Passive P

~
 被 VP

短受身構文の VP に_{PP} bei NP]が導入され長受身構文(27)が形成される。この場合では、同じ発音の 2 つの ‘被’ のうちの 1 つが同声削除を受ける。

(27) Passive P

~
 VP
 ~
 PP VP

┐

被 NP

2つの分析の違いは[bei+NP]と受身標識 bei ‘被’ の現れる順序である。分析1においては PP V であり、分析2においては V PP となる。

2.2.2 二重地位分析の問題点

TANG (2008) が二重地位分析の問題点を挙げている。

○二重地位説における長受身構文では副詞節「被+NP」は受身標識の bei ‘被’ と動詞句の間に現れる。しかし Huang (1999) によると全ての副詞節が短受身構文に現れるわけではない。(27)の長受身構文では副詞節「在大家面前」‘みんなの前で’ が bei ‘被’ と動詞句「骂了一顿」‘叱られた’ の間に現れるが、しかし、(28)の短受身構文では「在大家面前」‘みんなの前で’ が bei ‘被’ と動詞句「骂了一顿」‘叱られた’ の間に現れない。

(27) 张三 被 李四 在 大家 面前 骂了一顿

張三 BEI 李四 で みんな 前 叱る

‘張三が李四にみんなの前で叱られた。’

(28) *张三 被 在 大家 面前 骂了一顿

張三 BEI で みんな 前 叱る

‘張三が李四にみんなの前で叱られた。’

(29)のような例では、「派警察」 ‘警察を呼ぶ’ は中国語の文法でも副詞節として考えられる。しかし、「派警察」 ‘警察を呼ぶ’ は長受身構文の(29)では現れるが、(30)の短受身構文では単独で現れることはない。

(29) 张三 被 李四 派警察 抓住了.

張三 BEI 李四 警察を呼ぶ 捕まる

‘張三が李四の呼んだ警察に捕まった’

(30) * 张三 被 派警察 抓住了.

張三 BEI 警察を呼ぶ 捕まる

‘張三が（李四の）呼んだ警察に捕まった’

○二重地位分析によると、標準語では受身の前置詞は bei ‘被’ の他に gei ‘给’、jiao ‘叫’、rang ‘让’ もあり、受身標識は bei ‘被’ の他に gei ‘给’ がある。もし受身標識が bei ‘被’ である場合、発音が異なるが、「jiao+NP」、「rang+NP」、「gei+NP」は受身標識 bei ‘被’ の後ろに現れない。(31)は jiao ‘叫’ の場合、(32)は rang ‘让’ の場合、(33)は gei ‘给’ の場合である。

(31) * 张三 被 叫 车 撞了.

張三 BEI JIAO 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(32) * 张三 被 让 车 撞了.

張三 BEI RANG 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(33) * 张三 被 给 车 撞了.

張三 BEI GEI 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

二重地位の第一の分析([_{pp} bei NP]bei)に基づいて前置詞句を受身標識の前に置いても、

(34)～(36)では音形が異なっているにも関わらず非文法的である。

(34) *张三 叫 车 被 撞了.

張三 JIAO 車 BEI 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(35) *张三 让 车 被 撞了.

張三 RANG 車 BEI 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(36) *张三 给 车 被 撞了.

張三 GEI 車 BEI 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

二重地位の第二の分析に基づくと受身標識が *gei* ‘給’ である場合、前置詞句が *gei* ‘給’ の前に現れることが説明できず。例えば、(40)～(42)は非文法的である。

(37) 张三 被 车 给 撞了.

張三 BEI 車 GEI 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(38) 张三 叫 车 给 撞了.

張三 JIAO 車 GEI 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(39) 张三 让 车 给 撞了.

張三 RANG 車 GEI 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(40) *张三 给 被 车 撞了.

張三 GEI BEI 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(41) *张三 给 叫 车 撞了.

張三 GEI JIAO 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(42) *张三 给 让 车 撞了.

張三 GEI RANG 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

しかし、以下の(43)と(45)の例は文法的である。これらの例では、前置詞 jiao/rang ‘叫/让’が受身標識 bei/gei ‘被/给’と発音が異なるっており、受身標識を削除する原因が二重地位説によると説明できない。

(43) 张三 叫 车 撞了.

張三 JIAO 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(44) * 张三 被 叫 车 撞了.

張三 BEI JIAO 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

(45) 张三 让 车 撞了.

張三 RANG 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

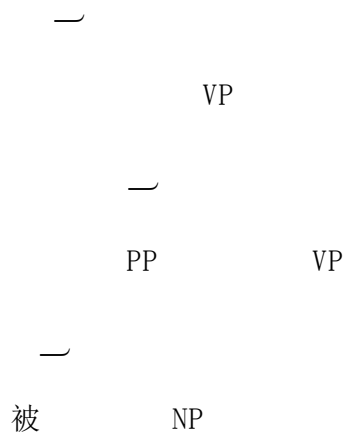
(46) * 张三 被 让 车 撞了.

張三 BEI RANG 車 轢かれる

‘張三が車に轢かれた.’

○主要部と補部には選択関係があるが、主要部と補部内の adjunct には選択関係がない。
従って、(47)における動詞句の adjunct は受身標識の bei ‘被’ と関係がないはずである。
「bei+NP」が現れるかどうかは随意的である。

(47) passiveP



しかし、広東語では bei2 と bei6 がある。bei6 は標準語の bei ‘被’ と同じ振る舞いをするが、bei2 は短受身構文では現れない。(48)は長受身構文での bei2 の振る舞いを示す事例であり、(49)は短受身構文での bei2 の振る舞いを示す事例である。

(48) 佢 俾 老板 闹了

彼 BEI2 ボース 叱る

‘彼がボースに叱られた.’

(49) * 佢 俾 闹了

彼 BEI2 叱る

‘彼が叱られた.’

○ 残留代名詞の容認度が異なる。Huang (1999) では残留代名詞は長受身構文においてのみ現れると主張されている。二重地位説によると、長受身構文の (50) と短受身構文の (51) は「bei+NP」以外の構造が同じであるはずだが、以下の例における残留代名詞の容認度が異なる。(50) の長受身構文では残留代名詞「他」「彼」が現れるが、(51) の短受身構文では残留代名詞「他」「彼」が現れない。

(50) 张三 被 李四 打了 他 一顿.

張三 BEI 李四 毆る 彼 一回

‘張三が李四に一回毆られた.’

(51) * 张三 被 打了 他 一顿.

張三 BEI 毆る 彼 一回

‘張三が李四に一回毆られた.’

2.3 補文分析

2.3.1 補文分析における長受身構文

Hashimoto(1987) と Wei(1994) では bei ‘被’ を動詞として分析する補文分析を提案されている。補文分析では (i) ‘被’ を主要動詞として扱い、(ii) 1 つの二重位置述部が経験を表す、(iii) 1 つの経験者 (Experiencer) は主語として選択する、(iv) 1 つの事象が補部として選択する。事象の目的語は主要主語と同一指標であるゆえ義務的に削除される。

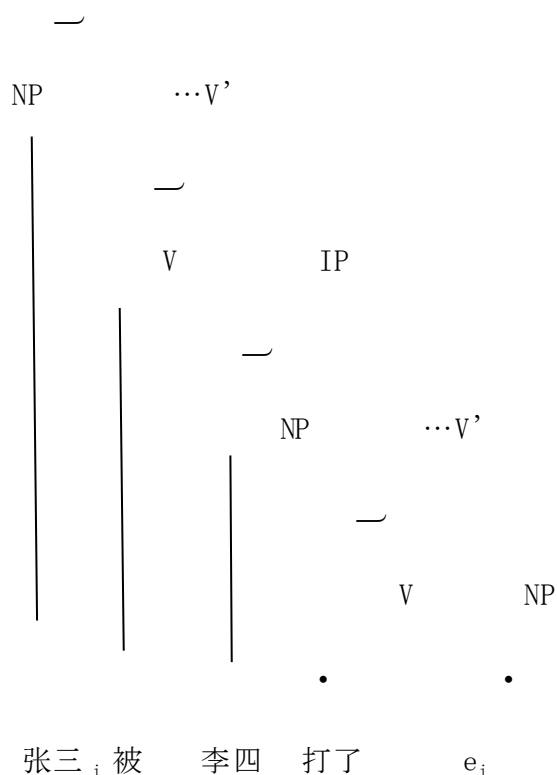
(1) 张三 被 李四 打了。

張三 BEI 李四 殴る

‘張三が李四に殴られた’

(1) のような中国語長受身構文は、以下の (52) のように派生される。

(52) IP



‘張三が李四に殴られた’

補文分析は NP 移動分析に生じる問題点を解決できる。第一に、bei ‘被’ は主語を持つ二重位置述部であるゆえ、主語指示が認可される。受身構文で経験者 (Experiencer) が存在しているゆえ、その経験者 (Experiencer) 意図的にとあることを経験することができる。第二に、bei ‘被’ は動作主 (Agent) NP と組み合わせて 1 つの PP を形成していないゆえ、PP のような振る舞いができない。第三に、動作主 (Agent) 項は 1 つ VP を含む IP に形成されるがゆえ、

coordination が認可できる。第四に、経験者 (Experiencer) の張三と動作主 (Agent) の李四は、ともに主語であるため「自己」「自分」の先行詞になることができる。

2.3.2 補文分析の問題点

Huang (2004) では前補文分析の問題点を指摘している。

○一般的に補文では、補部の目的語位置が代名詞や照応詞に埋め込まれる。しかし補文分析によると、受身構文も補文構文であるはずが、受身構文の目的語位置は代名詞や照応詞に埋め込まれない。

(53) 张三 说 李四 打了 他。

張三 言う 李四 殴る 彼

‘張三は李四が彼を殴ったと言った。’

(54) * 张三 被 李四 打了 自己。

張三 BEI 李四 殴る 自分

‘張三が李四に自分を殴られた。’

受身構文は一般的な補文の異なる振る舞いをするため補文分析が問題になる。

2.4 軽動詞分析

2.4.1 軽動詞分析における長受身構文

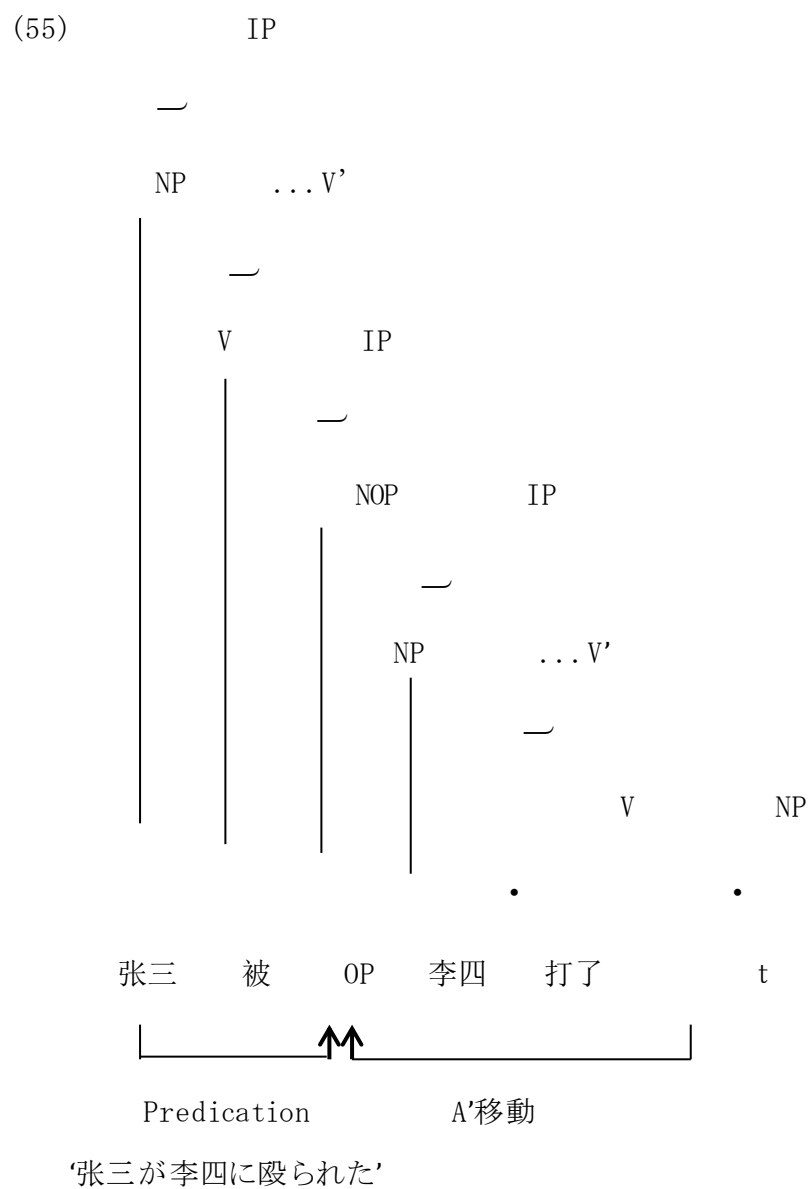
Feng (1995) は中国語の受身構文に英語の tough 構文に類似した分析を提案したが、その分析を基盤として Huang (2004) は中国語受身構文(1)に対して、(55)に示すように、空演算子 OP の A'移動を用いる分析を提案した。

(1) 张三 被 李四 打了。

張三 BEI 李四 殴る

‘張三が李四に殴られた’

(1) のような中国語長受身構文は、(55) のように派生される。



すなわち、Huang の分析では、中国語の長受身文では空演算子が動詞の後ろに導入され、そこで θ -role の標示を受けたのちに IP 付加して、基底生成された主語「张三」と叙述関係を構築する。また、この主語には Experiencer もしくは Agent の θ -role が与えられる。

(52) の分析で「张三」は事象を経験する Experiencer であるが、(55) の分析では「张三」は「李四」に殴られた対象として叙述される。2つの分析でにおける bei ‘被’ の範疇は異なる。(52)での bei ‘被’ は2つの項を取る他動詞であるが、(55)の bei ‘被’は1つの項を取る自動詞である。ここでは2つの述部、つまり主要述部 bei ‘被’と NOP 述部がある。(55)の分析では bei ‘被’ が助動詞あるいは軽動詞である。

2.4.2 NOP 分析の証拠

○長距離依存

中国語受身構文は「長距離依存」の特性がある。以下の受身構文は中国語で文法的である。

(56) 张三 被 李四 派 警察 抓走了
張三 BEI 李四 呼ぶ 警察 逮捕
‘張三 は 李四 が呼んだ警察に逮捕された。’

(57) 那封 信 我 叫 李四 请 王五 托 他 妹妹 送走了。
あの 手紙 私 JIAO 李四 お願い 王五 託す 彼 妹 送る
‘あの手紙は私が李四に頼んで、彼が王五の妹にお願いして送った。’

(56)では、「警察」「警察」に逮捕されたのは「张三」であるが、「警察」「警察」を呼んだのは「李四」である。「李四」は全体の動作主(Agent)である、「警察」「警察」は事象「张三被警察抓走了」「張三が逮捕された」の動作主(Agent)である。

「長距離依存」は A 移動の特性である。NOP 移動が A 移動であれば、上の現象が予測できる。

○島の効果

- (58) 张三 被 我 通知 李四 把 赞美 * (他) 的 书 都 买走了。
張三 BEI 私 知らせ 李四 BA 褒める 彼 の 本 全部
買う。

‘私が張三に知らせて、彼に頼んで李四に自分を褒める本を買わせた。’

(17)では埋め込まれた「本」「書」を修飾するVP「赞美」「褒める」の後ろに空所がある場合が非文法的である。「赞美」「褒める」の後の位置は残留代名詞がある場合は文法的であるが、長距離埋め込み文ではこのような空目的語の分布について似たような削除が存在しない。このような分布はA'移動の特性である。

○「所」

Chiu (1995)の観察によると、受身構文では下級動詞（(59)の例では了解‘知る’）の前にsuo ‘所’が現れる。

- (59) 这些 事情 不能 被 他们 所 了解
この こと ならない BEI 彼ら SUO 知る。
‘このことは彼らに知ればならない。’

以下の(60)のようなはsuo ‘所’を含む句は関係節の事例である。

- (60) 小偷 所 没有 偷走 的 那些 书 在 桌子上
泥棒 SUO ない 盗む の その 本 ZAI 机 上
‘泥棒に盗まれなかったその本は机の上にある。’

Suo ‘所’は目的語の関係代名詞と同じように扱われる。中国語関係節は空目的語位置のA’に属する特性があり、受身構文は関係節以外では唯一 suo ‘所’が現れる構造である。それは中国受身構文がA’移動を含んでいる証拠となりうる。

○残留代名詞

Feng (1995)では目的語位置の代名詞が主語を束縛することができると主張した。

(61) 张三 被 李四 打了 他 一下。

張三 BEI 李四 毆る 彼 一回

‘張三が李四に一回毆られた。’

NP 移動分析では(61)の文法性が予測できない。A’移動分析ではこの代名詞「他」「彼」は単に残留代名詞(A’移動の痕跡位置に音が生じない代名詞のこと)と分析される。その最小領域内 A’位置要素に束縛されているが、A 位置には束縛されていない。従って、A’移動分析では(61)の文法性が説明できる。(62)は(61)と異なり非文法的である。

(62) *张三 被 李四 打了 他。

張三 BEI 李四 毆る 彼

‘張三が李四に毆られた。’

加えた元素((61)の場合は「一下」「一回」)はどうして以上の例を文法的にするのかが不明であるが、同様の現象が関係節でも見られる。(64)は(63)と異なり、と「一下」「一回」という元素が加わっていることで文法的となっている。

(63) ??李四 打了 他 的 那个人 来了

李四 毆る 彼 の あの人 来る。

‘李四が毆ったあの人 came。’

(64) 李四 打了 他 一下 的 那个人 来了

李四 毆る 彼 一回 の あの 人 来る。

‘李四が一回殴ったあの人が来た。’

埋め込み節の主語は関係節と受身構文の場合は代随意的である。例えば(65)と(66)の場合は、代名詞「他」「彼」が存在してもしなくても文法的である。

(65) 张三 被 李四 怀疑 (他) 偷了 钱

張三 BEI 李四 疑う (彼) 盗む 金

‘張三が李四に金を盗んだと疑われた。’

(66) 李四 怀疑 (他) 偷了 钱 的 那个人 走了

李四 疑う (彼) 盗む 金 の あの 人 行った。

‘李四が金を盗んだと疑うあの人は行った。’

関係節でも受身構文でも目的語が ba ‘把’ の後に現れる時、残留代名詞が必要である。以下の(67)の例は受身構文の例である。ba ‘把’ の後ろには残留代名詞である「他」「彼」が必要である。(68)は関係節の例で、受身構文の例と同様に ba ‘把’ の後ろには残留代名詞の「他」「彼」が必要である。

(67) 张三 被 李四 把 他 骗得 团团转。

張三 BEI 李四 BA 彼 騙す 振り回す

‘張三が李四に振り回された。’

(68) 李四 把 他 骗得 团团转 的 那个人 走了

李四 BA 彼 騙す 振り回す の あの 人 行った

‘李四に振り回されたあの人が行った。’

A'移動では再述代名詞のこのような振る舞いを示すため、それはNOP分析がA'移動と関係があると考えられる。

2.4.3 短受身構文と長受身構文の相違点

長受身構文に対し、短受身構文は、一見すると長受身構文から動作主削除により派生されるように見えるが、Huangによると、短受身構文と長受身構文の派生は全く異なるものとなる。

○接近性

bei'被'を前置詞として分析する場合、前置詞残留によって、動作主(Agent) NPの削除が禁止される。(69)に示すように、「他」「彼」を削除すると非文法的になる。

(69) 张三, 这件 事 跟 * (他) 没有 关系

張三 この こと と 彼 ない 関係

‘張三、このこと、彼とは関係ない。’

Bei'被'を動詞として分析する場合も動作主(Agent) NPの削除ができない。Bei'被'が「V+NP+V」構造に現れる場合、NPが主節の構成素であろうが埋め込み節の主語であろうがAgent NPの削除は禁止される。

(70)* 张三, 我 是 一 生气了。

張三、私 は 一 怒る。

‘張三、私は怒られた。’

(71)* 李小姐, 我 逼 一 改嫁了。

李さん、私 無理やりに — 再婚

‘私は李さんを無理やりに再婚させた。’

○現れる年代

中国語では、短受身構文は 300BC に出現した。しかし、長受身構文は短受身構文が現れた約 500 年後 (AD200) に現れた。以下の例は「韓非子」からの引用である。

- (71) 今 兄弟 被 侵, 必 攻 者, 廉 也
今 兄弟 BEI 侵略 必ず 攻め 者 正直
知 友 被 辱, 遂 愁 者, 貞 也
知る 友 BEI 辱める すぐ 怒る 者 忠実

‘自分の兄弟がほかの人に侵略されたと知った、必ずその人を攻める者は正直である、自分の友が他の人に辱められると知った、すぐ怒る人は忠実である。’

長受身構文はこの段階ではまだ現れていなかった。この事実も短受身構文は長受身構文から Agent NP を削除されることによって派生されるものではない証拠である。

○義務的空目的語

義務的空目的語は現代長受身構文の特性であるが、短受身構文は出現当初からこの特性を持っている。以下の事例は、古代中国語長受身構文であり、当時は義務的空目的語が存在しなかった。

- (73) (李子熬) 被 鳴 鶴 吞 之
李子熬 BEI 鳴く 鶴 吞む 彼
‘李子熬が鳴く鶴に飲み込まれた。’

(「捜神記」から)

○副詞の位置

句を修飾する副詞と VP を修飾する副詞が長受身構文では現れるが、短受身構文では VP を修飾する副詞しか現れない。(74a)と(74b)は長受身構文の例であるため句を修飾する副詞「在学校」「学校で」と VP を修飾する副詞「莫名其妙地」「混乱する」が現れる。しかし、(75b)のように句を修飾する副詞「在学校」「学校で」が現れると非文法的になる。

(74)a. 张三 被 李四 莫名其妙地 骗走了。

张三 BEI 李四 混乱する 誘拐する

‘张三が混乱して李四に誘拐された。’

b. 张三 被 李四 在学校 骗走了。

张三 BEI 李四 学校で 誘拐する

‘张三が学校で李四に誘拐された。’

(75)a. 张三 被 莫名其妙地 骗走了。

张三 BEI 混乱する 誘拐する

‘张三が混乱して誘拐された。’

b.* 张三 被 在学校 骗走了。

张三 BEI 学校で 誘拐する

‘张三が学校で誘拐された。’

○「所」

長受身構文は下級動詞((59)の例では「了解」「知る」)の前に suo ‘所’ が現れるが短受

身構文では現れない。(59)は長受身構文であるため suo ‘所’ が現れる。それに対して、(76)の短受身構文の例では suo ‘所’ が現れない。

(59) 这些 事情 不能 被 他们 所 了解
この こと ならない BEI 彼ら SUO 知る
‘このことは彼らに知ればならない。’

(76)* 这些 事情 不能 被 所 了解
この こと ならない BEI SUO 知る
‘このことは(誰かに)知ればならない。’

○残留代名詞

長受身構文は残留代名詞を許すが、短受身構文は許さない。(61)の長受身構文では残留代名詞「他」「彼」が現れる。それに対して、(77)の短受身構文の例では、残留代名詞「他」「彼」が現れない。

(61) 张三 被 李四 打了 他 一下
張三 BEI 李四 毆る 彼 一回
‘張三が李四に一回毆られた。’

(77)* 张三 被 打了 他 一下
張三 BEI 毆る 彼 一回
‘張三が一回毆られた。’

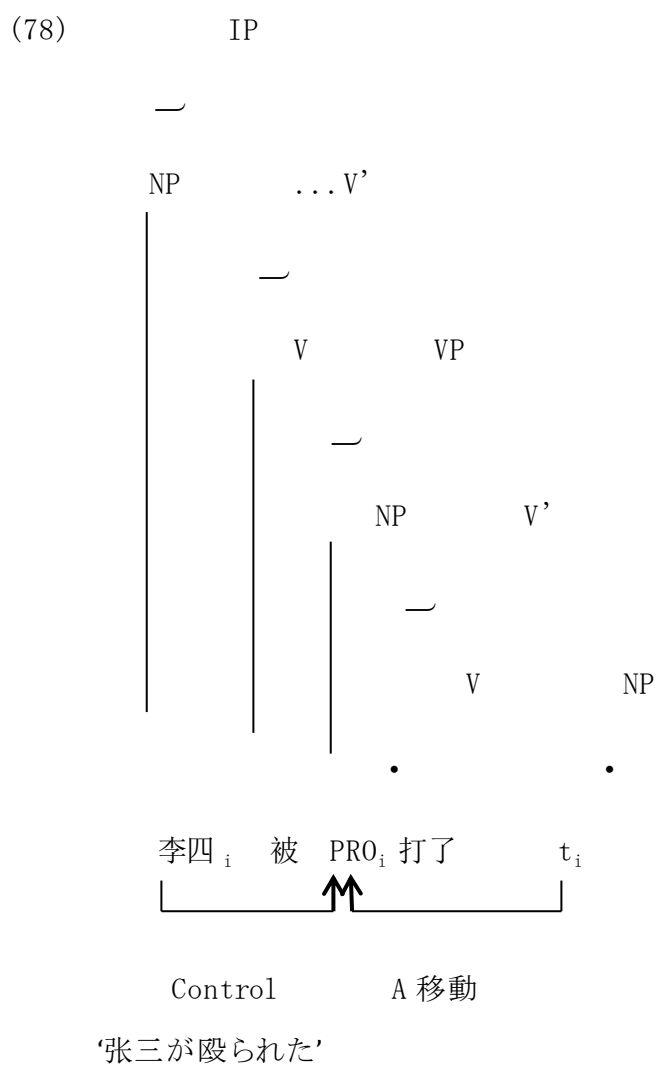
2.4.4 軽動詞分析における短受身構文

(2) 张三 被 打了

張三 BEI 殴る

‘張三が殴られた’

(2) のような短受身構文は、次のように PRO の A 移動とコントロールを含む構造として分析される。



2.4.5 間接受身文の包括的受身構文の分析

間接受身構文は主語が述部の目的語以外の位置と関係持つような構文であり、は包括的受身構文と、主語が表面的述部のどの位置とも関係をもたないような被害を受けることを示す事例は排他的受身構文と呼ばれる。

(3) 张三 被 土匪 打死了 爸爸
張三 BEI 強盜 殺す 父親
‘張三が父親を強盜に殺された’

(3) のような包括的受身構文は (79) のように派生される。

(79)

IP

NP

... V'

V

IP

NP

IP

NP

... V'

NP

V'

35



36

2.4.7 外部目的語が存在する理由

○Minimal Distance Principleは、1つのPROやNOPが一番近いC-Commanding NPにコントロールあるいは叙述されることを要求する。Minimal Distance Principle により、(81)では空主語Proが主語「李四」ではなくAgent「我」「私」にコントロールされる。それはある目的語が「我」「私」とVの間に存在するためである。

- (81) 李四 被 我 买走了 [[e] 最 喜欢 的 那本书]
李四 BEI 私 買 う 一 番 好 喜 の そ の 本
‘李四が私に一番大好きな本を買われた。’

○(82)では外部目的語が削除されているので bei ‘被’ の後ろの IP が不完全である。このことは1つの NP-trace が外部目的語の存在を証明する。

- (82) 张三 被 警察 囚刑 七年
張三 BEI 警察 実刑判決 七年
‘張三が警察に七年を実刑判決された。’

- (83)* 警察 囚刑 七年
警察 実刑判決 七年
‘警察に七年を実刑判決された。’

○日本語でも外部目的語が存在する場合があります、その存在は遊離数量詞により説明できる。

- (84) 学生が先生に三人 t 昨日 [作文を褒め]られた。

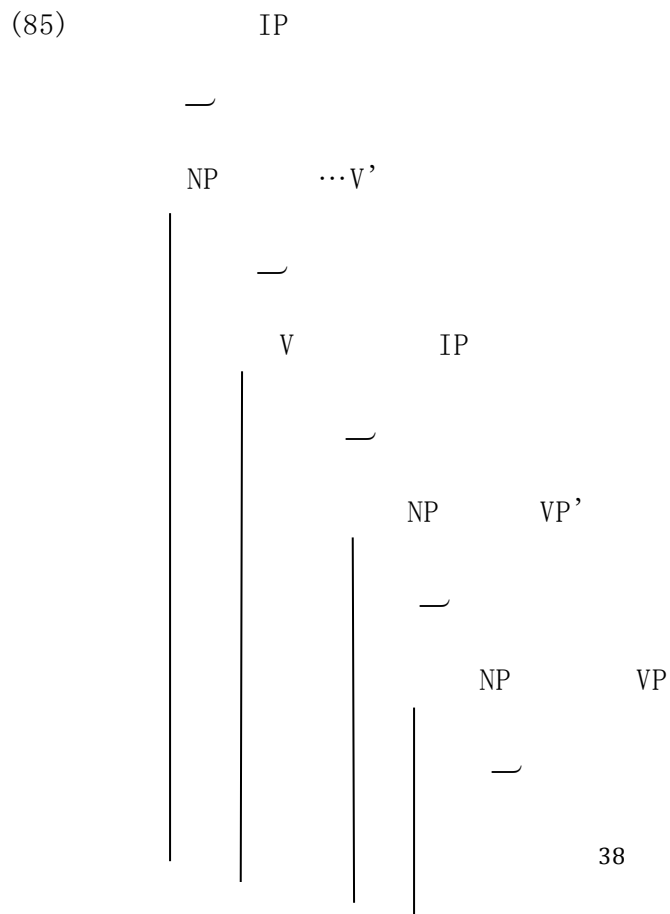
(84)の数量詞「三人」は「学生」と関係があるが、埋め込み節に残され、「作文」の所有者ではない。その構造が1つ「褒める」の外部で「られ」を主要部にする VP の内部の位置があ

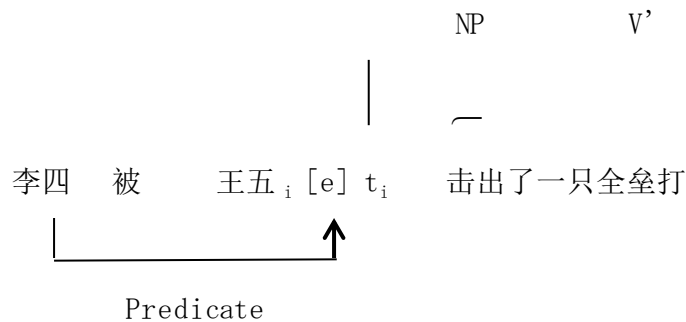
ると証明した。その位置は外部目的語である。

2.4.8 間接受身文の排他的受身構文の分析

- (4) 李四 被 王五 击出了 一只 全垒打
 李四 BEI 王五 打つ 1つ ホームラン
 ‘李四が王五に1つホームランを打たれる’

(4) のような被害を表す排他的受身構文は(85)のように分析される。





‘李四が王五に 1 つホームランを打たれた。’

(85)では、OP は外項として生成されたのち OP 移動を通じ、主語「李四」と叙述関係を構築する。

2.5 機能詞分析

2.5.1 機能詞分析における直接受身構文

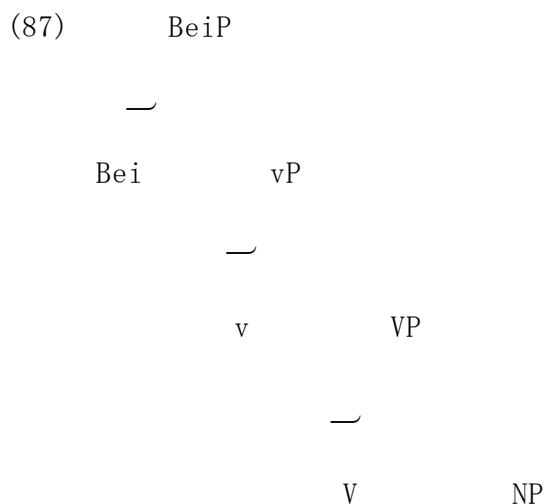
Li (2004) は機能詞分析を提案している。機能詞分析では bei ‘被’ が機能詞と分析され、Bei と標記される。

Bei ‘被’ が機能詞として分析される理論的根拠は 3 つである。

第一は、Radford(1997) の議論であり、彼は機能詞を「ただ文法的機能をもつ、数、人称、時制などの文法的特徴を指す要素であり、また内容を指すことができない要素である」と定義した。この観点に基づくと、ある語彙が内容を指すがどうかを判断するにはこの語彙にとって、反対の意味をもつ語彙があるかどうかを調べるという方法がある。中国語では「不被」という語彙が存在しないため、bei ‘被’ が内容を指すことができない。そして、bei ‘被’ が受身の意味を指す。以上の議論は bei ‘被’ が機能詞であることを支持する。

第二は、Chomsky(1998) による議論であり、彼は force あるいは mood を表す C、時制あるいは事象構造の T、他動詞の次動中心詞 v が三種類の核機能詞 CFC s であると述べた。しかし、Boeckx(1998) が述べたように、一部の機能詞はすべての人間言語で現れるが、その他の機能詞は個別言語で現れる。Bei ‘被’ は後者である。

第三は、bei‘被’がvと異なるという事実である。vは「起こす」「完成」の意味を表す機能詞である。vは抽象的で音形化されない。vはその後ろのVPと合成してvPを構成する。Bei‘被’は音声があり受身の意味を表す。そのほか、他動詞しか目的語がとれない、つまり項を含む句が受身構文になれるが、vは他動詞構造の次動中心詞であるゆえ、bei‘被’は受身の意味を表す機能詞として他動詞構造のvPを選ぶはずである。Chomskyの核機能詞の選択特徴仮説に基づくとvが選択されなければならない。さらに、vのみが機能詞に選択される。Bei‘被’は機能詞としてvを選択できる。以上の議論によると、bei‘被’の基本構造は以下のように考えられる。



Shi(1999)では「受身句の主語は始めは動詞の補語であり、その後移動を通じて表層位置に上がる」と主張した。そのほか He(1999)では「NPは語彙列(lexical array)でθ-roleを付

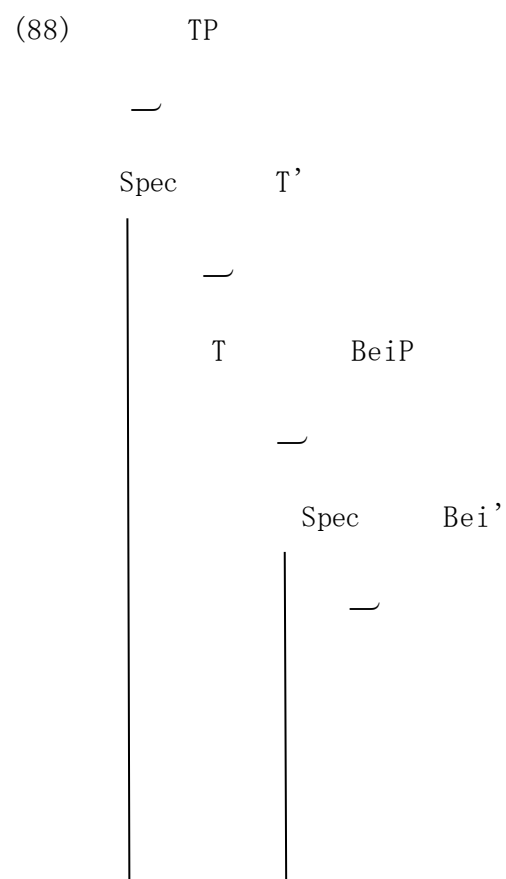
与される」と述べた。この仮説に基づくと、動詞は、まず主題(Theme)と併合し、その後到達点(Goal)と併合し、最後に動作主(Agent)と併合する。これを基にして、受身構造の派生で動作主(Agent)は機能詞 Bei の spec 位置に留まれば良いという仮説が立てる。

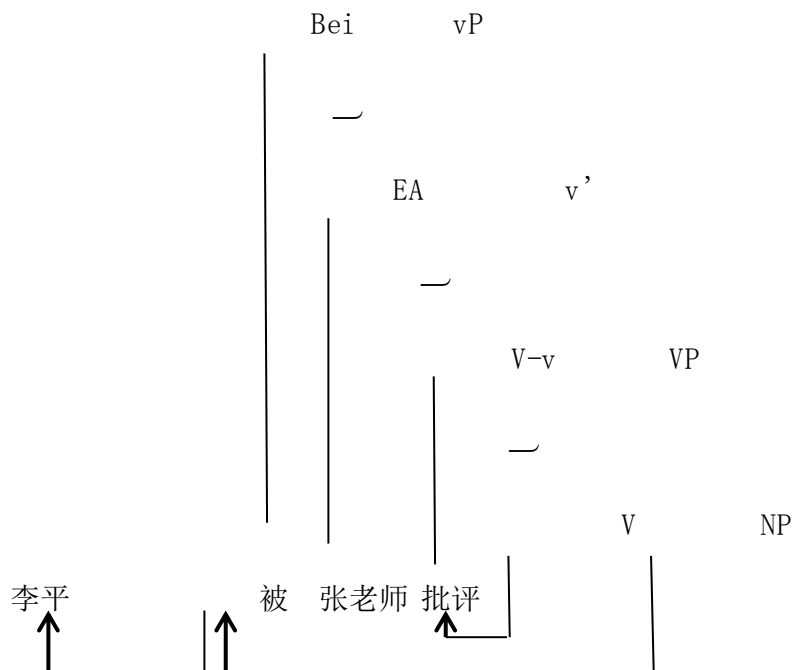
(87) 李平 被 张老师 批评了

李平 BEI 張先生 叱る

‘李平が張先生に叱られた。’

長受身構文の(87)は以下のように派生される。





‘李平が張先生に叱られた。’

動詞「批评」「叱る」はまず被動作主(Patient)「李平」併合してと VP になる、その後に v と併合する。「批评」「叱る」は v に膠着し v' を構成する。Chomsky の理論によると 3 つの核心機能詞は一致素性をもつ。T と v の一致素性は満たされなければならない。解釈不可能の素性として、一致素性が格一致システムと dislocation 操作の核心に構成する。v の一致特性以外にもう 2 つ解釈不可能性の素性がある。1 つは v の強名詞特性、もう 1 つは NP「李平」の一致素性である。V の一致素性が probe に探査され、NP「李平」の一致素性と一致する。残った v の強名詞特性は NP もしくは DP と併合するとされており、(51) の場合は「张老师」「張先生」と併合して解釈不可能の素性を削除される。

Bei は vP と併合する。Bei も強名詞特性を持つと仮定して、ある XP はその spec 位置に移動しなければならないとする。動作主(Agent)項は Bei の spec 位置に移動できないゆえ、李平は Bei の spec 位置に移動して解釈不可能の素性を削除される。

T は BeiP と併合する。T は EPP 特性があるゆえ、李平は Bei の spec 位置に移動して解釈不可能の素性を削除される。

(89) 李平 被 批评了

李平 BEI 叱る

‘李平が叱られた。’

短受身構文の(89)は以下のように派生する。

(90) TP

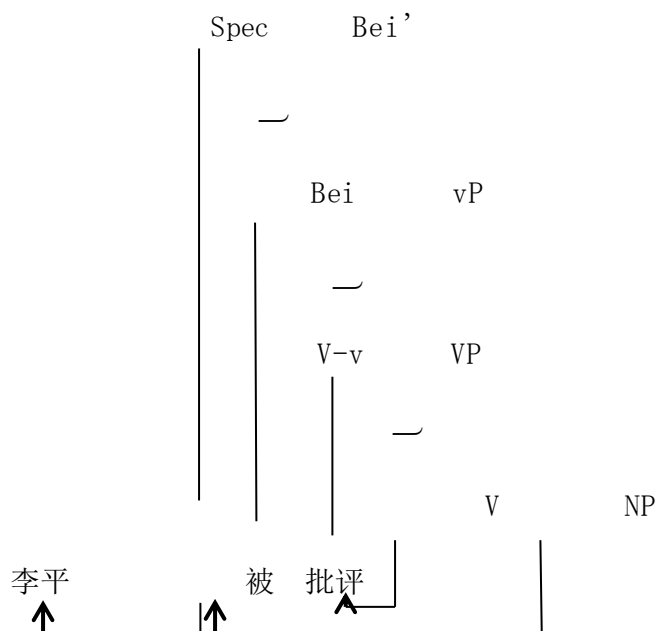
—

Spec T’

—

T BeiP

—



‘李平が叱られた。’

動詞「批评」はまず被動作主 (Patient) 「李平」と併合して VP を構成する。その後 VP は v と併合して、‘批评’は v に膠着し vP を構成する。受身構文の事例では v は EA は選択しなくてもよい。この段階では解釈不可能の素性が2つある。1つは v の一致素性、もう1つは NP「李平」の一致素性である。この2つの解釈不可能の素性が一致して解釈不可能の特性が削除される。Bei は vP と併合する。Bei も強名詞特性を持つと仮定すると、ある XP はその spec 位置に移動しなければならないとする。「李平」は Bei の spec 位置に移動して解釈不可能の素性を削除される。T は BeiP と併合する。T は EPP 特性があるので、李平は Bei の spec 位置に移動して EPP 素性と一致素性を削除される。

長受身構文と短受身構文は、短受身構文派生では lexicon に余っている項がない事実から区別される。なぜなら、v の構造特性の外項 (External argument) を要求していないためである。

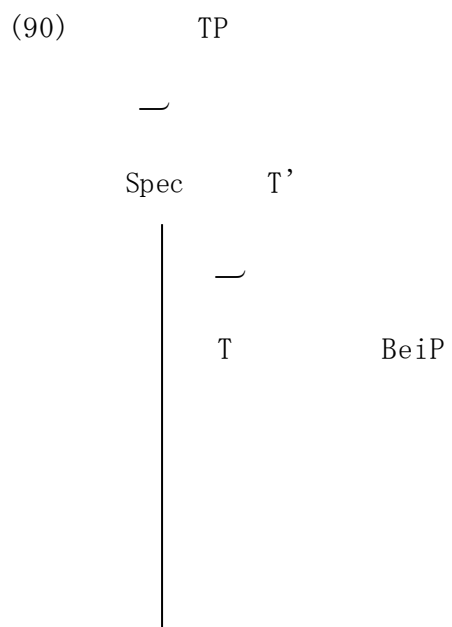
2.5.1 機能詞分析における間接受身構文

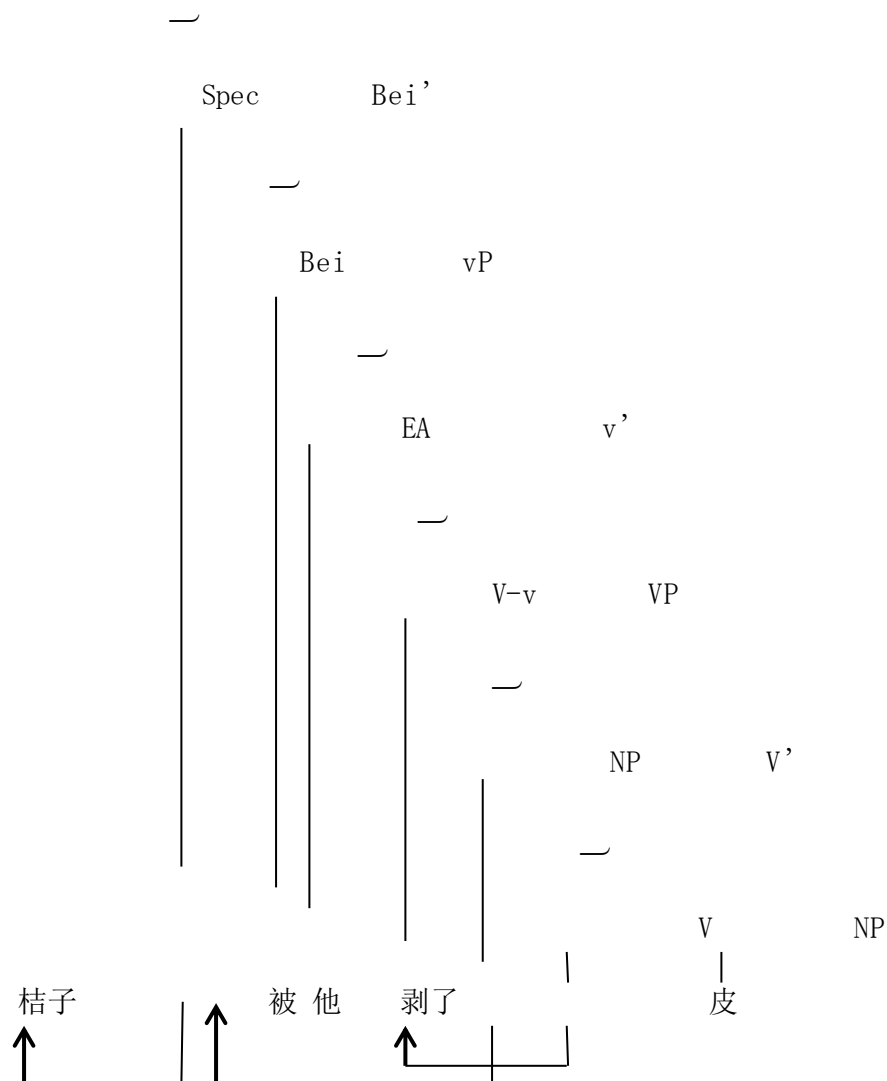
(6) 桔子 被 他 剥了 皮

オレンジ BEI 彼 抜く 皮。

‘オレンジの皮が彼に抜かれた。’

(6)のような中国語間接受身構文はTan(2006)により機能詞分析を用いて以下(90)のように派生される。





‘オレンジの皮が彼に抜かされた。’

動詞「剥」「抜く」は、まず主題(Theme)「皮」「皮」と併合して *V*' を構成する。その後 *V*' は受害者(Maleficiary)「桔子」「オレンジ」と併合して *VP* を構成する。そして *VP* は機能詞 *v* と併合し、他動詞「剥」「抜く」は *v* に膠着し *v*' を構成する。その段階では、解釈不可能の素性は3つある、1つは *v* の一致素性、1つは *NP*「桔子」「オレンジ」の構造格、もう1つは皮「皮」の内在格である。一致操作により3つの解釈不可能の素性が全部削除される。この時 *LA* では「他」「彼」はまだ構造に入っていないが、使役あるいは処置的意味を表す *v* の要求で「他」「彼」が *v*' と併合する。その後、*Bei* は *vP* と併合する。*Bei* も強名詞素性を持つと仮定して、ある *XP* はその *spec* 位置に移動しなければならないとする。動作主(Agent)

「他」「彼」は Bei の spec 位置に移動できないので、残った桔子「オレンジ」と「皮」「皮」の間は the shortest steps condition によって、「桔子」「オレンジ」が Bei の spec 位置に移動する。そして T は BeiP と併合して、T の EPP 素性の要求によって「桔子」「オレンジ」が T の spec 位置に移動する。

一般的に所有関係を持つ受身構文「张三的父亲被土匪杀了」「張三の父親が強盗に殺された」と「张三被土匪杀了父亲」「張三が強盗に父親を殺された」が「土匪杀了张三的父亲」「強盗が張三の父親を殺した」から派生されるが、問題はなぜ de「的」が消えるのかということである。Tan(2006)はその2つの受身構文が普遍素性 F から異なる [F] を選択して、違う語彙項目 (lexical item) に構成するのだと述べた。1 つは所有関係を表す de「的」を含み、もう 1 つは de「的」を含まない。前者の派生は「桔子被他剥了皮」「オレンジは彼に皮を抜かされた」と同様であり、後者は長受身構文の派生と同様である。

このように処理する理論的根拠は、left branching condition である、すなわち短名詞はもう 1 つの名詞の左側にある時、移動することを禁じる。「张三的父亲」の構造は [NP [NP 张三的] 父亲] であり、「张三」は構造の左側にあるゆえ移動できない。この 2 つの句の構造は全く異なる。

保留目的語は材料を表す時 (たとえば、「花被他浇了水」「花が彼に水をかけされた」、あるいは「水被他浇了花」「水を彼に花をかけされた」) は、前者の θ -role は受害者 (Maleficiary)、動作主 Agent 被動作主、(Patient) であり、後者の前者の θ -role は物質 (Material)、動作主 (Agent)、被動作主 (Patient) である。被動作主 (Patient) は θ -role 階級では動作主 (Agent) と物質 (Material) より低いことから、動詞はまず Patient と併合する。

「動詞+保留目的語」受身構文の場合、たとえば「他被学校免了职」「彼が学校にクビされた」ならば動詞「免」「クビ」と名詞「职」「職」は複合要素であるから動詞「免」「クビ」と名詞「职」「職」がまず併合してから「他」「彼」と併合する。併合してからの移動では「职」「職」は動詞に束縛されて文頭に移動できるものが「他」「彼」だけである。

第 3 章 軽動詞分析 VS 機能詞分析

前章では従来の中国語受身構文における前置詞分析、二重地位分析、補文分析、軽動詞分析、機能詞分析を概観した。2 章節では、これらの分析のうち、前置詞分析、二重地位分析、

補文分析についてその問題点を述べる。

前置詞分析の問題点は、主語の θ -role、「被+NP」が PP と違う振る舞いをする事、coordination テストの振る舞い、照応関係束縛である。

二重地位分析の問題点としては副詞節現れる場合、同声削除の問題、広東語 bei2 の振る舞い、残留代名詞の問題が挙げられる。

補文分析の問題点は受身構文の目的語位置の代名詞や照応詞の振る舞いが ECM 構文の目的語位置の代名詞や照応詞の振る舞いと異なることである。

では、前置詞分析、二重地位分析、補文分析以外の、軽動詞分析と機能詞分析には問題点があるのか。あるいは、中国語受身構文における軽動詞分析と機能詞分析のどちらかが優れているということはあるのか。

本章では、中国語受身構文における軽動詞分析と機能詞分析を、中国語の受身構文の例文を用いてテストし、その2つの分析の問題点を概観する。また、どちらがより優れているかを確かめることを目標とする。

3.1 軽動詞分析の場合

中国語受身構文には、以下の (91) と (92) のように、bei ‘被’ の後ろの項が無生物により占められる受身構文がある。

(91) 张三 被 那件事 愁死了。

张三 BEI あのこゝと 困る

‘張三があゝのこゝとで困る’

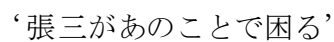
(91) の場合では、bei ‘被’ の後ろの項は「那件事」 ‘あゝのこゝと’ であり、「那件事」 ‘あゝのこゝと’ は無生物であり動作主 (Agent) にはなれない。

軽動詞分析の場合、その (91) は直接長受身構文と同じように考えることができ、以下のような派生をすると考えられる。

(92) IP

—

NP ... V’

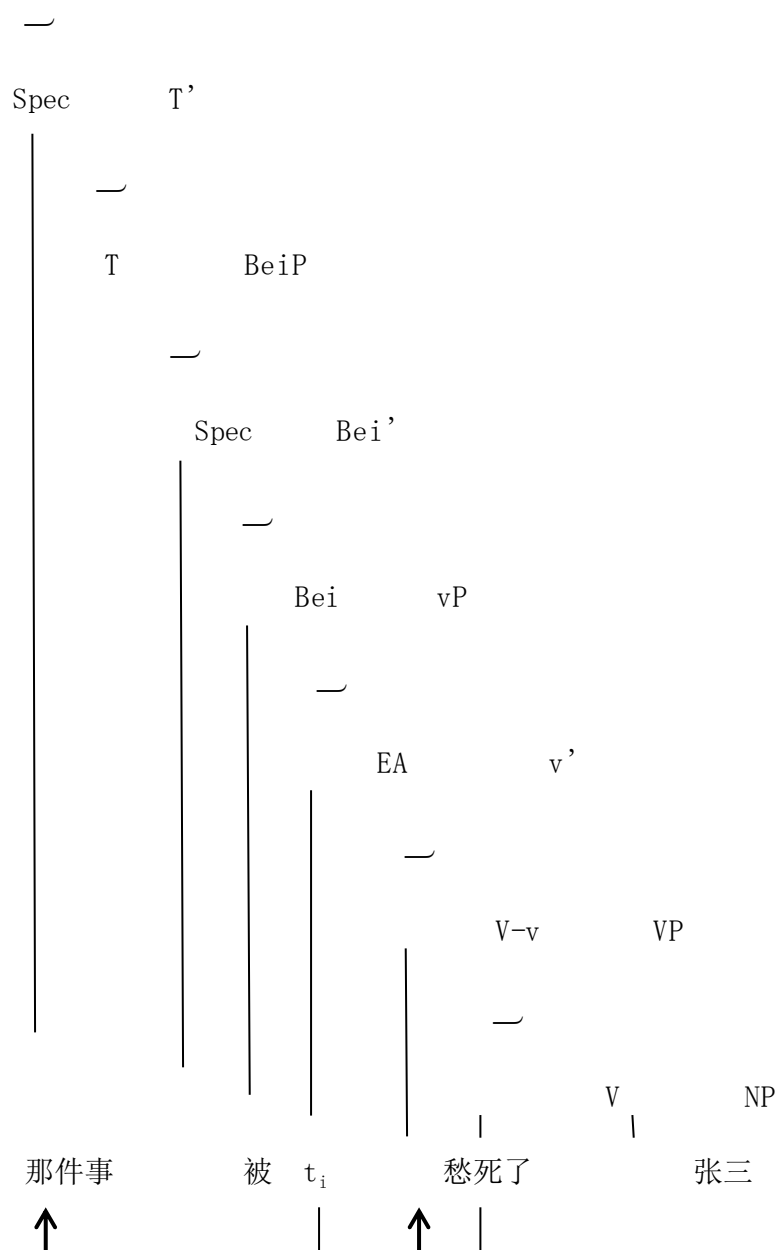


以上の分析から見ると、Huang(2004)のNOP分析はbei'被'の後ろの項が無生物、つまりbei'被'の後ろの項が動作主 (Agent) ではない例に適用できる。

50

(91) のように、bei‘被’の後ろの項が生物ではなく無生物である受身構文を機能詞を用いて分析すると、(91)は以下の(93)のように派生される。

(93) TP



‘張三があのことでする’

つまり動詞「愁死了」「あのこと」はまず被動作主(Patient)张三と併合して VP を構成する。

それから v と併合し、「愁死了」「あのこと」は v に膠着し v' を構成する。

その後、Bei は vP と併合する。Bei も強名詞素性を持つと仮定して、ある XP はその spec 位置に移動しなければならないとする。しかし(93)の場合は「那件事」「あのこと」は無生物なので Agent にはなれない。Li (2004) の観点によると Agent 項は Bei の spec 位置に移動できない。しかし(94)の場合「那件事」「あのこと」は動作主 (Agent) ではない。そうすると、「那件事」「あのこと」は Bei の spec 位置に移動して、最終的に (94) のような非文法的な文を生成する。

- (94) * 那件事 被 愁死了 张三。
 あのこと BEI 困る 张三
 ‘张三があのことで困る’

以上の事実を踏まえると、もし bei'被'の後ろの項にある要素が無生物、つまり動作主 (Agent) になれない場合では機能詞分析が適用できない。言い換えると、機能詞分析は bei'被'の後ろの項が動作主 (Agent) の時にだけ、その派生を説明できる。

bei'被'の後ろの項が非生物の場合は機能詞分析を用いることができない。

第4章 結論

本論文では、中国語の受身構文に関する先行研究を概観してきた。先行研究において bei' 被' を 様々な範疇として扱われてきた。

第二章では前置詞分析、二重地位分析、補文分析の問題点を示した。

前置詞分析問題点は主語の θ -role、「被+NP」が PP と違う振る舞いをする事、coordination テストの振る舞い、照応関係束縛の問題である。

二重地位分析の問題点は副詞節現れる場合、同声削除の問題、広東語 bei2 の振る舞い、残留代名詞の問題であるが挙げられる。

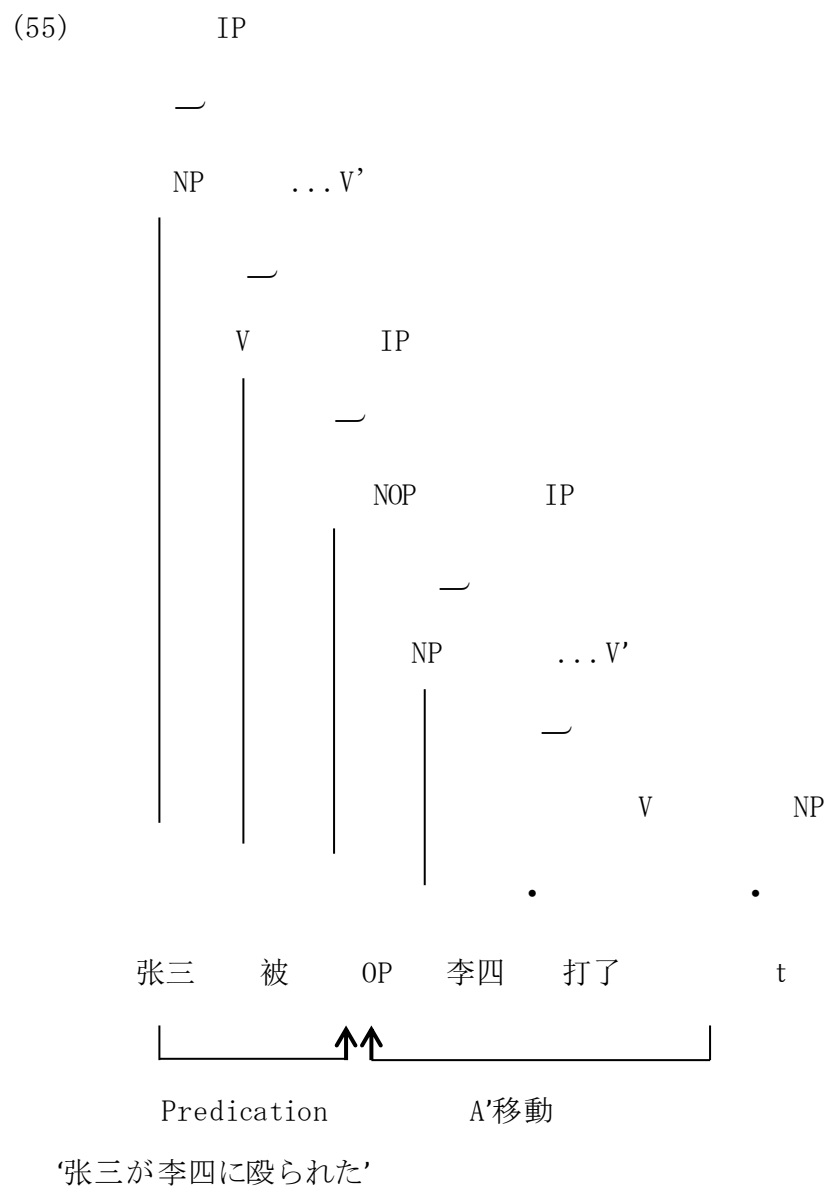
補文分析の問題点は受身構文の目的語位置の代名詞や照応詞の振る舞いが ECM 構文と異なることである。

そして、第三章では機能詞分析の問題を示した。

機能詞分析は Agent が Bei の spec 位置に移動できないから bei' 被' の後ろの項が非生物の受身構文が解釈できない。

以上から見ると、Huang(2004)の軽動詞分析は中国語受身構文の各場合に適用できる。Huang(2004)の分析を基くと、中国語直接受身構文の長受身構文も短受身構文も、そして中国語間接受身構文の包括的受身構文も排他的受身構文も解釈できる。

しかしながら、Huang(2004)の軽動詞分析においても疑問点が残っている。例えば、次の派生を考えることにする。



なぜ OP と叙述関係を構築するのがその OP とより近い位置にある「李四」ではなく遠い所にある「张三」であるのか。OP は近い位置にある「李四」より遠い位置にある「张三」を選択理由は何かこれらの問題については、さらに考察する余地が残る。

参考文献

- Chiu, B. 1995. An Object Projection in Mandarin Chinese [J]. *Journal of East Asian Linguistics* 4.
- Chomsky, N. 1998. *Minimalist Inquiries : the Framework* [M]. MIT Occasional Paper in Linguistics 15. MIT
- Feng, Shengli. 1995. Guanyue lilun yu Hanyu de beidong ju [GB theory and passive sentences in Chinese]. *Zhongguo Yuyanxue Luncong [Studies in Chinese Linguistics]* 1: 1-28.
- Hashimoto, Mantaro. 1987. Hanyu beidongshi de lishi quyu fazhan [The historical and geographical development of Chinese passive constructions]. *Zhongguo Yuwen* 196: 36-49.
- Huang, C-T. j. 1982. *Logic Relation Chinese and the Theory of Grammar* [D]. Cambridge, MIT.
- Huang, C-T. j. 1999. *Chinese Passives in Comparative Perspective* [D]. University of California.
- Huang, C-T. j. 2004. *The Syntax of Chinese*. Cambridge.
- Koopman, Hilda. 1984. *The syntax of verbs*. Dordrecht: Foris.
- Li, Y. -H. Audrey. 1985. Abstract case in Mandarin Chinese. Doctoral dissertation, University of Southern California, Los Angeles.
- Li, Y. -H. Audrey. 1990. *Order and constituency in Mandarin Chinese*. Dordrecht: Kluwer.
- Radford, A. 1997. *Syntax-A Minimalist Introduction* [M]. New York: Cambridge University Press.
- Travis, Lisa. 1984. Parameters and effects of word order variation. Doctoral dissertation, MIT.
- Washio, Ryuichi. 1993. When causatives mean passive. *Journal of East Asian Linguistics* 2: 45-90.

Wei, Pei-Chuan. 1994. Guhanyu beidongshi de fazhan yu yanbian jizhi [On the development and mechanism of change of the passive construction in Classical Chinese]. *Chinese Languages and Linguistics* 2: 293-319.

邓思颖, 2008. 汉语被动句句法分析的重新思考。《当代语言学》第10卷 2008年第4期 308-319页, 北京。

何晓炜, 1999. 双宾语结构的句法研究 [J]。现代外语4331-345。

李红梅, 2004. 《最简探索：框架》下对“被”字结构的再探索。《现代外语》2004年5月第27卷第2期。

谭晓平, 2006. 基于《最简探索：框架》的间接“被”字句生成的过程。中南大学学报（社会科学版）2006年12月第12卷第6期。